

たない当時の人口から考えると、大変な数といえます。これは、交通が不便で通信施設の未発達だった阿久比における、郵便の重要性を物語るものでもあります。

郵便局のもう一つの重要な役割は貯金業務でした。大正中ごろには、新規加入だけで10万円に達していました。払い戻しも同じように多く、銀行のない村内で、郵便局が金融機関の中心的な役割を果たしていたのです。

電話交換業務も郵便局がしていました。阿久比では、1923年（大正12年）に開局し、電話の普及はほかの市町村に比べて遅いものでした。開局当時の加入数は41件で、その後もあまり増えませんでした。

● 電灯の普及

日本に電灯が初めてともったのは、1878年（明治11年）東京でのことでした。名古屋は1889年（明治22年）に、知多地方では常滑線の沿線に1912年（明治45年）にとまりました。阿久比は、1914年（大正3年）になって半田・亀崎・成岩・武豊とともに知多瓦斯株式会社ちたがすかぶしがいしゃによって送電が開始されました。

電灯が敷かれるまでは、ランプを使っていました。新美南吉の童話「おじいさんのランプ」のモデルとなった岩滑新田のランプ屋が、ランプとホヤを大八車に積んで「ランプ、ホヤ」と言って、阿久比にも行商に来ていたようです。

このころの電灯は暗い電球でしたが、ランプと比べると驚くほどの明るさだったようです。電灯はついても、ほとんどの家が1灯だけでしたので、風呂場や便所などは相当遅くまでランプやカンテラが使われていました。

■ 第4節 近代教育の普及と発展

● 学制の発布と教育

1872年（明治5年）に政府は「学制」を発布しました。フランスの画一主義的制度をもとにして、アメリカやヨーロッパの実利主義を参考にして考えられました。「むら邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス」とする学制の根本精神は、四民平等に基づく教育の普及・機会均等を求めようとする、当時としてはとても進歩的なものでした。

明治6年には学校が開設され、阿久比16か村の就学者数は、男子351人・女子138人でした。男女差の大きな違いから当時の社会全体の風潮がわかります。授業料は、児童1人について毎月最低5厘から最高10銭でした。しかし、まだ一般の家庭では、授業料を納めて、子どもを学校に通わせるほどの余裕はなかったものと思われます。学校は、寺院や個人の家があてられました。教員数は、総整学校の3人、聡明学校の2人のほかはいずれも1人でした。

● 明治中・後期の教育

1886年（明治19年）に教育令が廃止され、学校令が公布されました。尋常科4年・高等科4年は

明治6年創立の学校

名称	所在地	創立	生徒	
			男	女
開継学校	官津村字宮本 谷性寺内	明治6年10月	69	30
友文学校	福住村字東脇 興昌寺内	明治6年	52	9
彫琢学校	草木村694 竹内伊右衛門宅	明治6年 9月	54	23
総整学校	坂部村 龍溪山洞雲院内	明治6年	80	29
聡明学校	角岡村 平泉寺内	明治6年	62	39
隆親学校	大古根村1485 蓮慶寺内	明治6年	34	8
計			351	138

児童数と初代校長（明治42年度）

学校名	在籍児童数			初代校長
	男	女	合計	
第一尋常小学校	269	255	524	森川 五郎
第二尋常小学校	164	141	305	富田 伴作
第三尋常小学校	73	83	156	岩屋辰之助
合計	506	479	985	

改められて、翌年の20年に義務教育は尋常科4年と定められました。

明治22年には「大日本帝国憲法」が制定され、翌23年には「教育に関する勅語」（教育勅語）が發布されました。太平洋戦争の敗戦まで、長く日本の教育指針になりました。

明治40年には小学校令が改正され、義務年限を2か年

延長して6か年としました。義務教育が延長になったので、校舎が不足しました。阿久比第二・第三尋常小学校（英比小・草木小）では、明治42年に校舎を新築しました。

明治32年度の「宮津尋常小学校沿革誌」によって、当時の学校の様子をうかがうことができます。たとえば家庭訪問・父兄会・父兄会実地授業および参観会・展覧会の状況・校内遊歩場などの項目があり、現在の様子とほとんど変わりがありません。

	明治5年	10年	12年	15年	17年	20年	22年	25年	30年	35年	39年
	阿久比16か村		阿久比村		阿久比12か村		阿久比村（阿久比・椋岡・矢高・植大） 東阿久比村（横松・萩・宮津・板山・福住） 上阿久比村（白沢・卯坂・草木）				
東部小	寺子屋	開成学校		宮津学校		宮津尋常小学校					
				分教場（福住・板山）							
英比小	寺子屋	友文学校	福住学校	宮津学校分校	福山学校	福山尋常小学校					
		徳登学校	坂部学校	卯取学校	組合草木尋常小学校	卯坂尋常小学校					
草木小	寺子屋	彫琢学校	草木学校		組合草木尋常小学校（卯坂分校）		草木尋常小学校				
南部小	寺子屋	聡明学校	角岡学校	長光寺学校	矢高尋常小学校						
	夜学校	陸奥学校	大古根学校	植大学校	矢高尋常小学校	植大尋常小学校					

● 大正のころの教育

大正期に入ると、それまで行われていた画一的な一斉授業を中心とした学習方法が改められ、児童中心の考え方が打ち出されるようになりました。明治・大正期の町村における教育の最大目標は、国民教育の徹底を図るために、就学率・出席率を高めることを重視したようです。

児童の就学・出席率歩合状況

地 区	就学歩合	順 位	出席歩合 (平均歩合)	順 位
全 国	98.25		93.01	
知多地方（本部）	97.47	県下12位	92.46	
阿久比村	98.57	郡下12位	95.57	郡下6位

〔全国分一県公報 大正3年1月17日付〕
〔知多地方・阿久比村分 大正5年12月末日調べ〕

● 戦時体制下のころの教育

1929年（昭和4年）に始まる世界的な経済恐慌に対して日本は、大陸への進出によってその活路をみいだそうとしました。昭和6年の満州事変、昭和12年以来の日中戦争などをきっかけとして戦時教育が打ち出されていきました。昭和16年12月8日に日本軍の真珠湾攻撃によって始まった太平洋戦争は、その流れを決定的にしました。教育は急速に戦時体制下におかれることになりました。

	明治40年	45年(大正元年)	5年	10年	15年(昭和元年)	5年	10年	15年	20年	
	阿久比村									
東部小	第一尋常小学校 (4分教場：宮津・植大・矢高・平泉寺)		第一尋常高等小学校				第一国民学校			
英比小	第二尋常小学校		第二尋常高等小学校				第二国民学校			
草木小	第三尋常小学校		第三尋常高等小学校				第三国民学校			
南部小	第一尋常小学校 (4分教場：宮津・植大・矢高・平泉寺)		第四尋常小学校 矢高分教場	第四尋常高等小学校				第四国民学校		

戦況が不利になってきた昭和19年には、国民学校高等科以上の学校に対して学徒動員令が敷かれ、全国の児童・生徒は4月半ばから続々と軍需工場へ動員されていきました。

勤労教育の組織として1918年（大正7年）から尋常小学校単位に補修学校ができました。大正15

年には「青年訓練所」が併設になり、昭和10年には青年学校へと発展しました。

第5節 徴兵制と日清・日露戦争

● 徴兵検査

富国強兵を目指す明治政府は、近代的な軍隊を作るために国民皆兵を目指して、1872年（明治5年）に徴兵告諭ちようへいこくゆを出し、翌年徴兵令を發布しました。男子は20歳になると徴兵検査を受け、兵隊になることが国民の義務となりました。

しかし、国民皆兵をうたいながら戸主、跡取り、官吏、学生や代人料金270円を納めた人などが兵役を免除されました。これは、有産者や家族制度を優遇するものでありました。貧しい一般民衆にとっては3年の兵役は若い働き手をとられることであり、大きな負担となりました。

徴兵検査は県下10数か所の検査所で、毎年4月から9月に行われました。阿久比の人々は半田で検査を受けていました。明治末から大正にかけての阿久比の徴兵検査の人数は、6、70人で、現役兵として入隊するのは、その2、30%でした。

壮丁人数と徴兵検査結果（大正5年）

年	壮丁人数	合格者数	現役兵	補充兵	国民兵
明治34	27	9	4		11
36	26	6	1		19
38	25	18	4		
40	79		22	23	41
44	69		16	19	18
大正2	65		18	24	20
4	83		23	18	37

阿久比村事務報告

● 陸海軍大演習

徴兵をもとに軍隊の編成が完了すると、政府は日本の対外進出に備え、大規模な演習を進めました。そして、1890年（明治23年）3月知多郡を中心にして第1回陸海軍大演習が行われました。この演習は、天皇を統監とうかんに参謀総長有栖川宮熾仁親王ありすがわのみやたるひとしんのう以下多くの重臣・将官のもとに、兵員約3万8,000人を動員して行われました。なかでも、30日に半田一帯で展開された陸軍演習がその中心でした。

半田地方が第1回の陸海軍大演習の舞台に選ばれたのは、東海道の中央に位置し、鉄道（東海道本線、武豊線）と海港（武豊港）を備えた軍事的にも重要な地であったこと、半田地方が徴兵に耐えうる経済力を持っていたことによると思われます。

この大演習は、大本営が置かれ宿泊所となった半田の有力者には、「天皇御臨幸の栄に浴した」として大きな誇りになりました。ただ、地元の人々や村内のほんの一部を通過しただけの阿久比の人々にとっては、ありがたい名誉なことというよりは、大規模な強制的な取り立てや道路・橋の修理、肥だめにふたをすることなどに対する驚きや負担の方を強く感じたようです。天皇がこのとき観戦した大字萩字上の割に「萩御野立所」の碑が建てられました。

● 日清戦争

明治の日本が経験した最初の本格的対外戦争は、1894～1895年（明治27～28年）の日清戦争でした。朝鮮に対する支配権の確保をねらって、日清両国が衝突したのですが、この戦争に勝利したことが、その後、日本がアジア諸国へ進出・侵略しんりやくを図っていく出発点となりました。また、清国から得た莫大な「賠償金ばいしょうきん」は、日本が富国強兵政策をいっそうおしすすめる資金に充てられました。

阿久比からも、22人が従軍しています。この時代にはまだ、太平洋戦争のときのように「死んで帰れ」と励まされるのではなく、村内で、戦勝祈願とあわせて従軍した兵士たちの安全祈願も行われていたようです。

● 日露戦争

明治 37 ~ 38 年の日露戦争は、日清戦争に比べるとはるかに大規模で、国民生活にも大きな影響をあたえました。阿久比からの従軍者も 191 人に及びました。当時の阿久比村（阿久比村・東阿久比村・上阿久比村の合計）の戸数は 1,590 戸（明治 38 年度『知多郡統計概覧』）ですから、8 戸に 1 人は出征兵士があったということになります。

人々は出征兵士のために歓送会を開き、出征家族の保護に努めました。また、軍資金の献納や戦時公債への応募などが奨励され、村を挙げての協力が行われました。

学校においても、忠君愛国心をかきたてる教育がすすめられ、戦時貯金が奨励されました。教育会が軍事講習会を開き、「戦況及び忠勇美談」を報告して「軍国思想の普及」に努め「愛国心の発動」をうながすなどの動きが、知多の各地で見られ、戦争が人々の身近に感じられるようになりました。

戦地からの手紙が、役場や家族や知人にあてて届くこともありました。検閲のある軍事郵便ですから、苦戦していることや機密にかかわることは書かれていませんが、厳寒の東北中国の戦地で迎えた正月のありさまをうかがわせる手紙などが町内に残されています。なかには、「旅順陥落の報を聞き、各宿營地で万歳をしたので、さしも広大な満州まるで一時に百雷が落ちたかのようだ」などと記しているものもあります。この旅順攻撃が実に多大な犠牲をともなっていたことは、今日ではよく知られています。

日露戦争での戦病死者は、全国で 12 万人にも及びましたが、阿久比でも出征者の 10% を超える 21 人が戦病死しました。阿久比・東阿久比・上阿久比のそれぞれの村では、村長以下が出席して盛大な村葬が行われましたが、戦死者の半数を超える 11 人が成人したばかりの 21、22 歳だったのをはじめ、19 人までが 20 代の青年でした。戦死は名誉なこととされましたが、家族や知人にとっては大きな悲しみでした。大変な犠牲を払いながらも、日本は形の上では戦争に勝ちました。国民は、完全に勝ったものと思いきまされていたから、ポーツマス講和会議の結果に不満があり、各地で講和反対運動が起こりました。

知多郡においても 2 万人が半田の江川堤に集まり、郡民大会を開いて講和反対を決議しています。

■ 第 6 節 15 年戦争と暮らし

● 15 年戦争と戦時体制

1929 年（昭和 4 年）米国ウォール街の株暴落から起こった世界恐慌は、日本にも大きな打撃を与えました。米英に比べ経済力が弱く、政治も不安定な日本では、この大不況からの脱出が簡単にはできませんでした。とくに中小企業や農村は悲惨な状態でした。

失業者の増大、企業倒産、農村不況などの打開策としてとられたのは、近隣アジア諸国への侵略と国内の軍国主義化（ファシズム）でした。中国への侵略は、昭和 6 年奉天郊外の柳条湖事件から満州事変へ発展し 15 年戦争の始まりとなりました。昭和 7 年には「満州国」を発足させ、それ以降中国の華北地方へと侵略を拡大していきました。そして、昭和 12 年盧溝橋事件をきっかけに中国との全面戦争（日中戦争）へと続き、泥沼の戦争が続けられました。出口のない戦争は、この先太平洋戦争、敗戦・無条件降伏へと続くことになりました。

中国侵略が長引くにつれ、政府や軍部は戦時体制を敷き、政治的・経済的・思想的統制を強化していきました。昭和 13 年に出された「国家総動員法」によって、政治・経済・思想教育・国民生活などすべてが統制管理の下に置かれ、国民や物資はすべて戦争遂行のために使われることになりました。

● 翼賛体制と隣組み

昭和 15 年には、合法化されていた政党が解散して、大政翼賛会が結成されました。戦争に反対する

者は抑圧されました。議会は、政府や軍部の戦争遂行に協力するだけで、反対や批判の意見は言えず、議会の役割を果たせなくなりました。地方においても、翼賛会の支部がつくられ戦争協力を進めました。選挙も翼賛会推薦の候補でないと当選できませんでした。それと同時に翼賛政治に従わせるために多くの組織がつくられました。阿久比村においても、青少年団・教育会・在郷軍人会・大日本婦人会・愛国婦人会・銃後奉公会・翼賛壮年団などの団体が結成されました。

そして戦争の拡大と長期化は、国民生活に必要な物資の不足を深刻にしていきました。最小限度のもの以外はぜいたくとして排除されました。電力の節約のためにパーマネントは禁止され、日の丸弁当がもてはやされ、国民服やモンペ姿が増えました。子どものおもちゃにも戦争玩具が流行しました。戦争宣伝や教化は、常会・地区会・隣組の行政の末端組織だけでなく、教育現場はもちろん、新聞・ラジオ・映画などマスメディアを通して行われました。

戦争体制はその後、「大東亜共栄圏」の確立、「東亜新秩序」の建設に向けていっそうの強化が図られました。そして、昭和15年には紀元2600年（「日本書紀」による神武天皇即位から数える）を祝う式典が全国の学校や神社で行われ、国民精神の高揚を目指しました。

戦争体制のなかで人々の生活に最も関係の深かったのは、常会—町内会（地区会）—隣組の組織でした。隣組は国民統制の末端組織として強制的につくられ、米麦の供出、食糧そのほかの配給、貯金や公債の割り当て、防空訓練など個人生活すべての面にまで管理・監視をしていきました。阿久比においても昭和15年ごろから結成が進められ、昭和18年には、地区会15・隣組159で世帯数1,642となりました。

隣組では、常会からの指令を受けて組長を中心に行動しました。太平洋戦争の初期のころは、岡本一平作詞の「隣組の歌」のように比較的余裕もありました。そして、出征した男性に代わって、女性がモンペ姿で勇ましく走り回りました。

● 戦争への協力

阿久比村農業会長から各字実行組合長・区長にあてた、軍需用梅干と干し草の供出に対する依頼状が残されています。（昭和15、6年）梅干は戦場における軍隊の食糧（握飯）に欠かせないものでした。また軍馬は戦場での乗馬や運搬用として利用され、そのエサの干し草の確保も重要だったのです。それで、戦場を遠く離れた阿久比の農家にまで、その供出が求められていたのです。この依頼を受けた各字では、さらにそれを字内の農家に割り当て責任を果たそうとしました。

政府はそれまでも、米穀の買い上げ、軍隊への配分を優先し、農産物の価格も上からの公定価格を押し付けてきました。そして、食糧危機が進むとともに、米の集荷配給を管理し、さらに米の強制買い上げ（供出制度）を実施して、流通・加工の管理統制、配給制へと進んでいきました。

農業が中心産業の阿久比では、梅干や干し草だけでなく米麦や野菜や果物をはじめ、さまざまな農産物の供出が行われました。村の供出割当量が決まっていて、それを地区ごと、戸数ごとに割り当てたのです。軍馬に与える干し草の全村1,536戸に対する割当量は約1万8,200貫（約68t）、ミカンは6,283貫（約24t）です。この量は、予想収穫量の7割とされています。

農家にとっては、出荷先が確保されてよいようにも思えますが、生産を強制されたうえ、供出価格は低く抑えられ、そのうえ供出代金は強制貯金や隣組貯金などに入れさせられたので、もうかるどころか苦しいものでした。一家の柱を戦争にとられた家では、残された女子や老人で農作業をしなくてはなり

第1回軍需供出梅干割当表
（昭和15年度）

字名	戸数	第1回供出割当数量(貫)
横松	43	4.60
萩	35	3.74
宮津	139	14.87
板山	98	10.48
福住	60	6.42
白沢	65	6.95
草木	231	24.71
坂部	61	6.52
卯之山	68	7.27
阿久比	75	8.02
椋岡	36	3.85
矢口	49	5.25
高岡	50	5.35
植	139	14.65
大古根	54	5.77
計	1,203	128.45

食糧増産応援隊割当

出動側種類別	出動月日	出動人員	備 考
名古屋市応援隊	11月 7日	250	市民応援隊
〃	12日	108	〃
〃	13日	102	〃
〃	19日	133	〃
学校応援隊	11日	150	半田中学校
〃	12日	150	半田女学校
〃	16日	190	愛知実践女学校
〃	17日	200	半田商業学校
〃	20日	200	尾張中学校
市民応援隊	16日	25	半田署勤務員
〃	17日	3	半田自転車小売商報会
〃	18日	3	◎織布
〃	23日	40	〃

(割当表の抜粋)

ませんでした。人手不足は、戦争が激しくなるにつれてひどくなりました。そこで、工場には、「不要不急」業種からの徴用工、未婚女子の^{きんろうていしんたい}勤勞挺身隊、勤勞学徒などが動員されました。農村には、学校生徒や市民が「食糧増産応援隊」に組織されて、農繁期に動員されてきました。このページの資料は、昭和16年の収穫期に阿久比に來た食糧増産応援隊です。半月足らずの間に、名古屋からの市民応援隊593人、半田や名古屋の旧制中学校や女学校から890人、半田や地元の応援隊71人、合計1,554人ものがやってきました。8時ごろの到着時間になると、駅まで迎えに行き、農作業のやり方などを教えながら刈り入れ作業に励んだそうです。このような半強制的な戦争協力の一つに、金属回収がありました。もともと資源の乏しい日本ですから、長引く戦争と輸入の途絶はたちまち原料不足をおこし、武器弾薬の製造にもこと欠くようになりました。そこで国を挙げて、金属類の回収が進められました。

阿久比でも、学校・寺院・工場をはじめ各家庭で協力しました。使用していない鍋や釜や鉄びんなどから、学校では国旗掲揚塔や二宮尊徳銅像、寺院では^{さいせんばこ}賽銭箱や^{ぼんしょう}梵鐘、工場では軍需への転用でいらなくなった織機などが回収されました。



正盛院の梵鐘供出 (昭和18年)

● 耐乏生活

国民は多くの苦勞や困難にもかかわらず、戦争に協力してきました。戦況についての本当のことが国民に知らされず、日清・日露戦争、第一次世界大戦と、今まで負けたことがないのだから必ず勝てると思込まされてきたからです。

太平洋戦争は当初、先制攻撃で有利だったのですが、連合国側の反攻が始まり、ミッドウェー海戦に敗れてからは、日本はじりじりと敗退していきました。中国大陸の戦線も泥沼でした。その事実は国民には全く知らされませんでした。物資は不足し生活は苦しくなっていました。政府は、「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません勝つまでは」といった標語をかかげて、国民の気持ちを戦争協力に向けさせました。

生活必需品の不足に対して、配給制がとられました。砂糖・マッチから始まった配給制は、米穀が昭和16年に実施され、それ以降生活用品のほとんどすべてに拡大されました。米穀の1人当たりの割り当て量は、成人で1日2合3勺(約330g)でしたが、配給事情の悪化で、昭和20年には2合1勺になり、それも豆かすやサツマイモなどの代用品で配られることも多くなりました。不足する米を補うために、ご飯の中にムギやイモを混ぜて炊いたり、ご飯の代わりに小麦粉にふすま(小麦から粉をとったあとの皮の粉末)を混ぜて作ったダンゴを煮たすいとんを食べました。食糧不足を補うために、阿久比でも空き地や校庭などが開墾されて、サツマイモやカボチャなどが作られました。塩不足にも悩まされたようで、海水を煮詰めて塩を作ったこともあったそうです。それでも農家の多い阿久比では、食糧については都市部に比べると、比較的恵まれていたようで、何とか命をつなぐことはできました。ただ、田畑を持たない人や縁故疎開で村にやっ

衣料切符の点数 (昭和17年)

あわせ、長じゅばん、綿入れ、丹前	48点
背広、モーニング、燕尾服の三ぞろい	50点
国民服、学生服の上下	32点
婦人ワンピース	25点
海水着	12点
男女学童服上下	17点
労働作業衣、防空服	24点
モンペ	10点
ワイシャツ、開きんシャツ	12点
くつ下、くつ下カバー	2点
パンツ	4点
敷きぶとん	24点
毛布	18点
手ぬぐい	3点
縫い糸 (10匁)	1点

てきた人たちには、厳しかったようです。

マッチや石けんといった日用品の不足にも悩まされました。配給されたものを大事に使うだけでは足りなく、代用品を工夫しました。石けんの代わりに米のぬかやとぎ汁を使いましたが、汚れは思うように落ちませんでしたし、衛生的とはいえませんでした。

綿花や羊毛などを輸入に頼る衣類の不足も深刻で、昭和17年には切符制になりました。戦争末期には、都市への空襲が激しくなってきました。それに備えての防空演習は、警防団が中心になって村民みなに参加して行われました。さいわいに阿久比は空襲がなく、草木と知多市境に被弾した程度でしたが、中島飛行機の工場があった半田市は、昭和20年7月には激しい空襲を受け、300人以上の死者が出て多数の家屋が焼かれました。中島飛行機では、昭和19年12月の東南海地震でも大きな被害を受けました。このとき阿久比から行っていた勤労働員学徒が2人犠牲になっています。

市街地も大きな工場もなく、直接空襲を受けなかった阿久比には、いま、戦争の傷跡を示すものはみあたりません。しかし、乙川の耕地を埋めて造った、中島飛行機の工場の埋め立て用の土は、横松の山を削ったものでしたし、そのあとには、地下工場のためのトンネルが掘られていました。その付近には、連行・徴用された朝鮮人を含む労働者用の飯場や住居もあったそうです。飛行機工場での生産にともなって、阿久比の工場もその部品を作る軍需工場となるものも多くありました。このように、阿久比も戦争体制のなかに深く組み込まれていたのです。



配給切符

● 従軍兵士と残る人

戦争の拡大とともに、兵役に服する人の数も増大していきました。昭和の初めまでは、徴兵検査の結果、現役兵として入営するものは、2、3割でしたが、昭和16年には半数以上が現役に服しました。そして、18年には徴兵年齢が19歳から45歳までに広げられ、若者ばかりでなく、妻子ある一家の柱までもが召集されるようになりました。召集された兵士の数は正確にはわかりませんが、ほとんどの家から出征したのです。そして、中国・満州からフィリピン・ビルマ・太平洋の島々など各地の戦場へ連れていかれました。

これら出征兵士に対しては、村に残る人々は、見送りや武運長久祈願ぶうんちやうきゆうきがんをしたり、慰問文・慰問袋を送ったり、戦没軍人の出迎えや葬儀に出たりの協力をしました。しかし、人々の願いもむなしく、戦争が終わるまでに多くの戦病死者が出ました。15年戦争での日本の戦病死者・空襲での死者は、300万人を超えるといわれていますが、阿久比の戦病死者も、戦没者名簿によると270人に達しています。

日中・太平洋戦争
戦没者数

地 区	戦没者数
横 松	10
萩	12
宮 津	26
板 山	18
福 住	20
白 沢	26
草 木	51
坂 部	13
卯 之 山	15
阿 久 比	15
椋 岡	9
矢 口	9
高 岡	6
植	27
大 古 根	13
計	270

「戦没者名簿」